

柏崎

江波左衛門作

季は	地は	前は越後	後は信濃	前	ワキ シテ	柏崎殿の家臣小太郎 柏崎殿の妻
十月				後	子方（謡なし） ワキヅレ シテ（狂女）	子息花若 善光寺住僧 前に同じ

「夢路も添ひて古郷に。く。帰るや現なるらん。

詞
「是は越後の国柏崎殿の御内に。小太郎と申す者にて候。さても頼み奉りし人は。訴訟の事候ひて。

道行
在鎌倉にて御座候ひしが。唯かりそめに風の心地と仰せ候ひて。程なく空しくなり給ひて候。又御子息花若殿も。同じく在鎌倉にて御座候ひしが。父御の御別れを歎き給ひ。何くともなく御遁世にて候。さる間花若殿の御文に。御形見の品々を取
りそへ。只今故郷柏崎へと急ぎ候。

「乾しぬべき。日影も袖やぬらすらん。く。今行く道は雪の下。一通り降る村時雨。山の内をも過ぎ行けば。袖さえまさる旅衣。碓氷の峠うちすぎて。越後に早く着きにけり。く。

ワキ詞
「急ぎ候ふほどに。故郷柏崎に着きて候。まづく案内を申さうするにて候。如何に申し候。鎌倉より小太郎が参りて候ふそれく御申し候へ。

「なに小太郎とは。もし殿の御帰りありたるか。あらめづらしや何とて物をば申さぬぞ。

ワキ 「さん候ふ是までは参りて候へども。何と申し上ぐべきやらん。更に思ひも弁へず候。

シテ 「あら心もとなや。物をば申さでさめぐと泣くは。さて花若が方に何事がある。

ワキ 「さん候花若殿は御遁世にて御座候。

シテ 「何と花若が遁世したるとは。さては父の叱りける

か。など追手をばかけざりしそ。

ワキ 「いや左様にも御座なく候。様々の御形見の物を持ちて参りて候。

シテ 「何さまぐの形見とは。さては花若が父の空しくなりたるな。此程はそなたの風もなつかしく。便りもうれしかりつるに。形見をとゞくる音信は。中々聞きても恨めしきぞや。たゞ仮初に立ち出でゝ。やがてと言ひし其主は。

地「昔語りに早なりて。形見を見るぞ涙なる。

ロングシテ
「さてや最期の折節は。いかなる事か宣ひし。委しく語りおはしませ。せめては聞いて慰まん。

ワキ
「唯故郷の御事を。おぼつかなく思し召し。御最期までも人知れず。ひそかに御詫ありしなり。

シテ
「實にやさこそはおはすらめ。三年離れて其後は。我も御名残。いつの世にかは忘るべき。

ワキ
「御ことわりと思へども。歎きをとゞめおはしまし。

形見を御覧候へ。

シテ
「實にや歎きても。かひなき世ぞと思へば。

地
「形見を見るからに。すゝむ涙はせきあへず。

「花若殿の御文の候。これを御覧候へ。

シテ
「さてもなく父御前。痛はりつかせ給ひ。程なく空しくなり給へば。心内の悲しさは。唯おぼしめしやらせ給へ。我も歸りて御ありさま。見参らせたくは候へども。思ひ立ちぬる修行の道。もしや

ワキ詞

止められ申さんと。思ふ心を便りにて。心づよく
も出づるなり。命つれなく候はゞ。三年が内には
参るべし。様々の形見を御覽じて。御心を慰みお
はしませと。書いたる文の恨めしや。

下歌地

「なからん父が名残には。子ほどの形見あるべきか。

上歌
「父が別れば如何なれば。く。悲しみ修行に出づ
る身の。などや生きてある。母に姿を見みえんと。
思ふ心のなからん。恨めしの我子や。うき時は。

恨みながらもさりとては。我子のゆくへ安穩に。
守らせ給へ神仏と。祈る心ぞあはれなる。く。

(中入)

僧詞

「かやうに候ふ者は。信濃の国善光寺の住僧にて候。
又是に渡り候ふ人は。いづくとも知らず愚僧を頼
むよし仰せ候ふ程に。師弟の契約をなし。此ほど
出家させ申して候。さる間毎日如来堂へ伴なひ申
し候。今日も又参らばやと思ひ候。

「是なる童部どもは何を笑ふぞ。何物に狂ふがをか
しいとや。うたてやな心あらん人は。訪ひてこそ
たぶべけれ。それをいかにといふに。夫には死し
て別れ。唯ひとり忘れ形身とも思ふべき。子の行
方をも白糸の。」

地 「乱れ心や狂ふらん。」

シテサシ 「實にや人の身のあだなりけりと。誰かいひけん空
言や。又思ひには死なれざりけりと。よみしもこ

とわりや。今身の上に知られたり。是もひとへに
夫や子の。故と思へば恨めしや。」

下歌地 「うき身は何と檣の葉の。柏崎をば狂ひ出で。」

上歌地 「越後の国府に着きしかば。く。人目も分かぬ我
姿。いつまで草のいつまでと。知らぬ心は麻衣。
浦はるぐと行くほどに。松風遠くさびしきは。
常磐の里の夕べかな。我にたぐへて。あはれなる
は此里。子故に身をこがしゝは。野辺のきじまの

里とかや。降れどもつもらぬ淡雪の。浅野といふ
は是かとよ。桐の花咲く井の上の。山を東に見な
して。西に向へば善光寺。正身の弥陀如来。わが
狂乱はさておきぬ。死して別れし。夫を導きおは
しませ。

僧詞
「いかに狂女。御堂の内陣へは叶ふまじきぞ。急い
で出で候へ。

シテ詞
「極重悪人無他方便。唯称弥陀得生極楽とこそ見え

たれ。

僧
「是は不思議の物狂ひかな。そもそも左様の事をば誰が
教へけるぞ。

シテ
「教へは本よりみだ如来の。御誓ひにてはましまさ
ずや。唯心の淨土と聞く時は。此善光寺の如來堂
の。内陣こそは極樂の。九品上生の台なるに。女
人の参るまじきとの御制戒とはそもそもされば。如來
の仰せありけるか。よし人々は何ともいへ。声こ

そしるべ南無阿弥陀仏。

地「頼もしや。く。

シテ
「釈迦は遣り。

地「弥陀は導く一筋に。こゝを去ること遠からず。是ぞ西方極楽の。上品上生の。内陣にいざや参らん。光明遍照十方の。誓ひぞしるき此寺の。常の灯影頼む。夜念佛申せ人々よ。夜念佛いざや申さん。

シテ詞
「いかに申し候。如来へ参らせ物の候。此烏帽子直

垂は。別れし夫の形見なれども。形見こそ今はあだなれ是なくは。忘るゝひまもあらまし物をと。よみしも思ひ知られたり。是を如来に参らせて。

夫の後生善所をも。祈らばやと思ひ候。あらいとほしや此烏帽子直垂の主は。ようづ何事につきても聞からず。弓は三物とやらんを射そろへ。歌連歌の道も達者なりし上。又酒盛などの折節は。いで人々に乱舞まうて見せんとて。鎧直垂とりいだ

し。衣紋うつくしく着ないて。へりぬり取つて打ちかづき。手拍子人に囁させて。扇おつ取り。鳴るは滝の水。

地クリ
「それ一念称名の声の内には。攝取の光明を待ち。聖衆来迎の雲の上には。

シテ
「九品蓮台の花散りて。

地
「異香みちくして人に薰じ。白虹地に満ちて連なれり。

シテサシ
「つらく世間の幻相を観ずるに。飛花落葉の風の前には。有為の転変をさとり。

地
「電光石火の影の中には。生死の去來を見る事。始めて驚くべきにはあらねども。幾世の夢とまとはりし。仮の親子の今をだに。添ひはてもせぬ道芝の。露のうき身の置き処。

シテ
「誰に問はまし旅の道。

地
「是もうき世の習ひかや。

「悲しみの涙眼にさへぎり。思ひの煙胸に満つ。つら／＼之を案ずるに。三界に流転して。猶人間の妄執の。晴れがたき雲の端の。月の御影や明らけき。真如平等の台に。至らんとだにも歎かずして。煩惱のきづなに。結ぼゝれぬるぞ悲しき。罪障の山高く。生死の海ふかし。如何にとしてか此生に。此身を浮べんと。實に歎けども人間の。身三口四意三の。十の道おほかりき。

^{シテ}
「されば初めの御法にも。

地「三界一心なり。心外無別法。心仏及衆生と聞く時は。是三無差別。なに疑ひのあるべきや。己身の弥陀如来。唯心の淨土なるべくは。尋ねべからず此寺の。御池の蓮の。得ん事をなどか知らざらん。

只願はくは影たのむ。声を力の助船。黄金の岸に至るべし。そもそも樂しみを極むなる。教へあまたに生れ行く。道さまぐの品なれや。宝の池の

水。功德池の浜の真砂。かずくの玉の床。台も品々の。樂みを極め量りなき。命の仏なるべしや。若我成仏。十方の世界なるべし。

シテ
「本願あやまり給はずは。

地
「今ロの我らが願はしき。夫の行方を白雲の。たなびく山や西の空の。彼國に迎へつゝ。一つ淨土の縁となし。望みを叶へ給ふべしと。称名も鉢の音も。曉かけて灯の。善き光ぞと仰ぐなりや。南無歸命

弥陀尊。願ひをかなへ給へや。

ロ
「今は何をかつゝむべき。是こそ御子花若と。いふにもすゝむ涙かな。

シテ
「我子ぞと。聞けば余りに堪へかぬる。夢かとばかり思ひ子の。何れぞさてもふしげやな。

地
「ともにそれとは思へども。かはる姿は墨染の。

シテ
「見しにもあらぬ面忘れ。

地
「母の姿もうつゝなき。

シテ
「狂人といひ。

地
「おとろへといひ。互にあきれたりながら。よく
く見れば園原や。伏屋に生ふる筍木の。ありと
は見えて逢はぬとこそ。聞きし物を今ははや。う
たがひもなき其母や子に。逢ふこそうれしかりけ
れ。く。